



Title	ケンペル『日本誌』と編者ドーム：「啓蒙」をめぐる議論を手がかりに
Author(s)	中, 直一
Citation	ドイツ啓蒙主義研究. 2001, 1, p. 27-41
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73810
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ケンペル『日本誌』と編者ドーム

—「啓蒙」をめぐる議論を手がかりに—

中 直一

1 問題の所在

本論文はヴィルヘルム・フォン・ドーム(Christian Wilhelm von Dohm, 1751-1820)の人物像に着目し、かれの活動の二側面——ベルリンを中心に活動した啓蒙主義人脈に連なる人物としての側面と、ケンペル『日本誌』編者としての側面——の相関を明らかにしようと試みるものである。

筆者はかつてヴィルヘルム・フォン・フンボルトについて調べた際、若きフンボルトが国民経済学の私的講義¹を受けた人物として、はじめてドームの名に接した。フンボルトは後にラシュタット講話会議(1797-99 年)の際にプロイセンの次席全権として、首席全権のハルデンベルクに随行するが、その時に第三席全権をつとめたのがドームである。また若き日のドームは、ベルリンをはじめとする北ドイツの知識人と様々な交流を持ち、ドイツ啓蒙主義時代を代表する知識人結社である「水曜会」(Mittwochsgesellschaft)に属し、また『ベルリン月報』(Die Berlinische Monatschrift)の寄稿者でもあった。ドームは、啓蒙主義時代のドイツにあって、よしや中心的な役割を演じたとは言えないまでも、ひとつの注目に値する存在であったと解される人物である。

さて筆者にとって、ドームは 18 世紀ドイツ文化史の中で上記の如き人物としての位置づけを得ていたのだが、その後筆者自身、ドイツ啓蒙主義時代の研究を離れ、日独の言語文化交流に関心領域を移してゆくに従い、有り体に言ってドームの名は記憶から薄れていった。ケンペル『日本誌』について調査してゆく際に、その編者としてドームの名を見た時しばらくは、ドイツ啓蒙主義の時代に活躍したあのドームと同一人物であることに思いを致せなかったほどである。

周知のようにエンゲルベルト・ケンペル(Engelbert Kaempfer, 1651-1716)の『日本誌』は、ケンペルの生前刊行されることはなく、彼の死後、その原稿はイギリス人ハンス・スローン(Hans Sloane, 1669-1753)に売却された。この原稿からスイス人ショイヒツァー(Johann Caspar Scheuchzer, 1702-29)が英語に訳した英訳版が 1727 年に刊行された²。(ちなみにスローンはケンペルの他の日本コレクションも購入しており、スローンのコレクションは、ケンペル関係以外のものも含めて、1759 年に大英博物館が創設された時の基礎的収蔵品となっている。)英訳版出版から半世紀ほどたって、イギリスに送られた原稿とは別の原稿がレムゴで発見され、それをもとにしてドイツ語版『日本誌』が 1777 年(第1巻)および 79 年(第2巻)に発行された³。このドイツ語版を編集したのがドームである。長らく英訳版(そして英訳版からの重訳であるフランス語版、オランダ語版、またフランス語版からの再重訳であるドイツ語版——いわゆるロストク版⁴——)し

か存在しなかった 18 世紀の読書界に、ケンペル自筆原稿に基づく『日本誌』を提供した人物として、ドームはきわめて重要な役割を果たしたと言えよう。

このようにドームは、一方でドイツ啓蒙主義において重要な役割を演じつつ、他方でケンペル『日本誌』編者としての功績を有しているわけであるが、奇妙なことに両者の関係については、従来研究はおろか、言及されたことすらきわめて少ない。たとえば Allgemeine Deutsche Biographie⁵でドームを調べてみると、たしかに啓蒙主義時代に活躍したこと、後に外交官として多大の成果を収めたことは詳しく書いているが、ケンペル『日本誌』の編者であることについては、ただの一言も触れられていない。Deutsche Biographische Enzyklopädie においても同様である⁶。他方、ケンペル『日本誌』研究者の間では、ドームの編集ぶりについて議論されることはあっても、18 世紀ドイツの知的風土においてドームがどのような役割を担ってきたのかについて関心が払われることは全くなかったと言って過言ではない。つまりドイツ啓蒙主義研究におけるドームと、『日本誌』研究におけるドームが、ほとんど接点を持たぬまま今日に至っているのである。

本論文においてはこのような状況にかんがみ、『日本誌』編集者としてのドームと、ベルリン知識人サークルの中におけるドームの人間像を、「啓蒙」をめぐる議論を視野に収めつつ、検討してゆきたい。

2 ドーム版『日本誌』の功罪

上にも記したように、『日本誌』はまず英訳版から出版され、その後 1773 年にケンペルの姪マリ・ア・マグダレーナ・ケンペルの遺品中よりケンペルの原稿が発見され、それをもとによりやくドイツ語版が作成された。この間の経緯については、ドーム自身が「刊行者の序文」の中で明らかにしている。それによれば、ドイツで発見された原稿には2種類あり、ひとつはケンペル自筆のもので、かなり未整理な状態にあった。ドームはこれを「伯父の原稿」(Handschrift des Oheims)と名付けた。もうひとつはドームによって「甥の原稿」(Handschrift des Neffen)と名付けられたもので、ドームはこれをケンペルの遺産を相続した甥ヨハン・ヘルマン・ケンペルが印刷用に清書したものと考えた⁷。ヨハン・ヘルマンは印刷をなすことなく没し、ケンペルのこの原稿はヨハン・ヘルマンの妹(エンゲルベルト・ケンペルの姪)が引き継ぐこととなった。彼女の死後、ケンペルの原稿が遺品の中から発見されたわけである。

ドームは『日本誌』を編集するに際し、「伯父の原稿」「甥の原稿」および英訳版『日本誌』を比較校合し、かつ当時既に古びたものと見なされたケンペルの文体を18世紀後半の読者に読みやすい文体に改めた。編集の基本方針を、ドームは刊行者序文の中で次のように述べている。「きわめて厳格な良心と些末ともいえる正確さを以て、ケンペルの言わんとする所および考え方を、まったく変更することなく再現すること。ただただ何物も付け加えず、何物も削除しないこと。しかしまた、ケンペルの考え方には変更を加えぬまま、文献としての精度を損なわない範囲で、読みやすく洗練された文体で提供すること。」⁸この部分は他の文章よりも大きなポイントを使用して印刷されており、読者に強い印象を与えたものと推測される。それかあらぬか、ドーム版は長ら

く日独両国においてケンペル『日本誌』の定本としての役割を担ってきた⁹。

しかし、ここでケンペルの自筆原稿に関しひとつの問題が起こる。ドームの説明によれば、ケンペルの下書き原稿(伯父の原稿)を、甥が印刷所に渡せるような形に編集したことになる。ところで、1727年の英訳版の翻訳底本となったドイツ語原稿は、甥ヨハン・ヘルマン自身によってスローンに売却されたものである。この原稿は一体何物であったのか。ケンペルは2種類自筆原稿を作成していたのであろうか。それとも、ケンペルの自筆原稿は「伯父の原稿」のみであって、ヨハン・ヘルマンがスローンに売却したのは、その写しでしかなかったのか¹⁰。

このような問題を解決するには英訳版の翻訳底本となった原稿を調査すれば済むことだが、不思議なことと言うべきか、大英図書館に原稿が現存することさえ、近年に至るまで知られてはいなかったようである。いやそれどころか、ロンドンの原稿が既に行方不明になっていると考えた研究者さえいた。たとえばヒュルスは1980年の論文の中で、ケンペル研究者カール＝マイヤーが1920年代に「当時まだロンドンの大英博物館にあった原稿」を見た、と述べている¹¹。つまりヒュルスは1980年には既にロンドンに原稿は現存しないと考えていたのである。実際には原稿は今も大英図書館にある(1973年に大英図書館が大英博物館より独立した際にケンペル・コレクションは図書館側に移管されている)。ごく近年になってようやく、大英図書館の原稿に対する本格的な調査がなされるようになった。その結果、ドームの推測と相反する事柄が次第に明らかになってきた。以下に、これらの研究の成果を紹介しよう。

ケンペルは生前、2種類の原稿を作った。ひとつは下書きで、これはドームの言う「伯父の原稿」にあたる。この原稿はスローンに売却されることなく、甥のヨハン・ヘルマン、さらに彼の死後ケンペルの姪が保管していた。もうひとつはロンドンの大英図書館に現存するもので、ケンペルが印刷用に清書したが、印刷することなくケンペル本人が没し、死後スローンに買い取られたものである。この清書原稿をもとに、ショイヒツァーが英訳をなしたが、ショイヒツァーは直接この清書原稿を英訳したのではなく、編集のためにさらに別のドイツ語の原稿をつくったようである。甥のヨハン・ヘルマンは原稿をスローンに売却するに際し、スローンの代理人に対し、英訳版を出版するのみならずドイツ語版も出版するようにとの契約を結んでいた。英訳版は出版されたがドイツ語版は結局出版されず、その代わり、ケンペルの原稿の写しがヨハン・ヘルマンに渡されることになった。ケンペルの自筆原稿そのものの写しではなく、上に記したショイヒツァーによる編集の手の加わった別版のドイツ語原稿を、さらに別の筆写人が写し取ったものであったと推測される。ヨハン・ヘルマンは、渡された原稿をもとに自らの手でドイツ語版を出版しようと考え、この原稿の上に(おそらくは編集者の名前として)自分の名前を書いた表紙をつけた。ヨハン・ヘルマンは、結局ドイツ語版の出版を果たすことなく没し、この原稿は「伯父の原稿」とともに彼の妹に遺贈された。ドームは原稿の上にある甥の名前を見て、これを「伯父の原稿」を甥が清書用にまとめたものと誤認し、「甥の原稿」と名付けたものであると今日では考えられている¹²。

大英図書館の原稿の調査によって、書誌的な事柄について従来の考え方を覆すような事態が次々に発見されたが、もうひとつ重要な発見があった。本論文冒頭にも述べたように、ドーム版は長らくケンペル『日本誌』の定本としての位置づけを得てきたが、ケンペル自筆原稿とドーム版

の対照によって、ドーム版の持つ問題点が次第にあきらかになってきたのである。以下にボダルト＝ベイリー氏の研究によりつつ、ドーム版の問題点を摘記しよう。

まず第一にドーム版に単純ミスが散見される。たとえば長崎の「町使の者(ちょうしのもの)」が犯罪人を捕縛する技術にすぐれているとするケンペルの記述に関し、自筆原稿では「格闘の技術に長けている」(in der ringe kunst geübt)と記されている箇所が、ドーム版では「歌唱術に長けている」(in der Singekunst gut geübt) となっている¹³。つまり ringen(格闘する)と singen(歌う)の誤記・誤植をドームは見逃しているのである。このような単純ミスのほかに、ボダルト＝ベイリー氏によれば、ドーム版にはドーム自身の価値観にもとづく原文への加筆・修正が随所に施されているという。たとえば日本人の宗教心について論じた箇所に関し、ケンペルの自筆原稿では「礼拝」をあらわすニュートラルな表現である Gottesdienst が使用されているが、ドーム版では「邪神礼拝」とでも訳しうる Götzendienst に書き換えられている¹⁴。つまり日本の宗教に対して否定的に見るドームの態度が、使用語彙の変更となってあらわれているとされるのである。その他ドーム版には、ショイヒツァーの英訳に依存する面がかなりある。ショイヒツァーはケンペルの原稿を英訳するに際し、ケンペルが日本の宗教を賞賛している部分を削除し、あるいは偶々ケンペルが日本の宗教を批判的に論じている部分があれば、その箇所をことさら強調するように英訳しており、ショイヒツァーの英訳自身、問題点をはらむわけだが、ドーム版には、英訳版における改変をそのまま採用している箇所がある。ドーム自身は、「伯父の原稿」「甥の原稿」および英訳版の三者を比較校合したと述べているが、ボダルト＝ベイリー氏の判断によれば、ドーム版は「英語版のほとんど逐語的な翻訳」¹⁵であるとさえ評され、これら諸々のことを勘案すると、ケンペルの『日本誌』は「著者の意図を反映した形では、いまだかつて世に現れたことはない」¹⁶とされるわけである。

このように近年ケンペル研究者の間では、ドーム版の編集態度に対する批判的吟味がなされつつあり、今後ケンペルの『日本誌』を論ずる際には、ドーム版のもつこのような特質を視野に入れないわけには行かない。ところで本論文の目的とするところは、ドーム版の欠点をあげつらう事にあるのではない。ケンペル『日本誌』に関心をもつ筆者としては、たしかにドーム版の編集方針の問題点を等閑視するわけには行かぬが、他方、18世紀ドイツ啓蒙主義に関心を持つ者として、ドームがなぜあのような改変をおこなったのか、それらの改変はドームのどのような認識関心に由来するものなのか、またそれは単にドームの個人的なものなのか——このような問題をも併せ考察しないわけには行かない。すなわち、ドームを頭ごなしに否定的に見るのではなく、ドームの編集態度の中に18世紀ドイツの知識人の異文化への対応の一つの典型が、いわばはしなくもあらわれているのではないかと考えるわけである。それでは、ドームとはいかなる人物であったのだろうか。以下にわれわれは、18世紀後半のベルリンを中心とする北ドイツの知識人社会の中で果たしたドームの役割を見てゆこう。

3 18世紀後半のドイツ知識人社会とドーム

ドームの伝記的な事柄についての研究は非常に少なく、まとまったものとしてはドームの死後4

年たって発行されたグローナウの伝記的叙述¹⁷とダムバッハーの分析¹⁸が存在するのみである。他の研究書はおおむねこの両書に依拠しており、ダムバッハーの著作自体、伝記的な項目についてはグローナウに負うところ大である。従って本論文ではおもにグローナウによりつつ、ドームの活動について吟味したい。

ドームが生まれたのはレムゴ、すなわちケンペルと同じ町である。ドームの父はレムゴの牧師をつとめ、また文筆活動もなした。母はリップの *Regierungsrat* (私訳「政府顧問」) の娘であった。少年時代のドームは読書好きで、とりわけ歴史と政治に関心を示した。このことをグローナウは、伝記執筆当時存命であったドームの友人たちから直接取材したようである¹⁹。1769年秋、17才の時にドームはライプツィヒ大学に入学し、ゲラート(Christian Fürchtegott Gellert, 1715-69)の道徳学およびエルネスティ²⁰の神学および哲学の講義を聴講したが、エルネスティの神学講義を聴いてかえって神学への興味を失い、1770年からは法学に転じている。

このころドームはバーゼドウ(Johannes Bernhard Basedow, 1724-90)の著作に接し、非常な影響を受けた。1770年と言えば、バーゼドウの『教育法の書』(*Methodenbuch für Väter und Mütter der Familien und Völker*)が出版された年である。ドームは当時アルトナに住んでいたバーゼドウに手紙を書いた。手紙そのものは残されていないものの、この手紙を読んだバーゼドウの友人ヴォルケが次のような文章を残している。「ドームはとりわけて次のように書いていた。自分にとっては真理ほど貴重なものはない。自分は知識を得て真理に到達しようとした。しかし今に至るまで、真理についての疑問の余地なき定義が存在するかどうか、またいかにしたらそれが存在するか、疑念を抱いている。[……]自分は、彼[バーゼドウのこと]によって、キリストによって発せられた質問「真理とは何か？」への解答に到達したい。」²¹バーゼドウに対する18才のドームの心酔ぶりを伺わせる文章であるが、ドームは手紙を送るだけで満足せず、1771年初頭からはアルトナのバーゼドウ宅に身を寄せ、バーゼドウのデッサウへの転居(同年末)にともない、自らもデッサウに転じている。ただし実際にバーゼドウと接してドームはむしろ失望を感じ、翌72年にはバーゼドウのもとを去り、ライプツィヒに戻っている。

ライプツィヒでドームは、かねてより知遇をえていたガルヴェ(Christian Garve, 1742-98)の旧宅に住むことが出来たのみならず、ガルヴェの蔵書を自由に閲覧することを許された。ガルヴェはライプツィヒ大学の哲学の教授であり、またフリードリヒII世の委託を受けてキケロの『義務について』をドイツ語に訳した人物としても著名である。このころからドームは翻訳・著作活動を開始している。1773年にはフランス人ボネの哲学書のドイツ語訳(*Des Herrn Karl Bonnet's phychologischer Versuch, als eine Einleitung zu seinen philosophischen Schriften*)をレムゴで出版した。独訳の作業自体はデッサウ時代に開始されていたが、翻訳をドームにすすめたのはバーゼドウを介して知り合ったラーヴァター(Johann Kaspar Lavater, 1741-1801)である。(ラーヴァターの有名な『観相学』が出版されたのは1772年である。)また様々な書評を書くようになり、ドームはこの頃から徐々に周囲の人から文筆家として注目されるようになった。ドームは将来の文筆活動について、グライム(Johann Wilhelm Ludwig Gleim, 1719-1803)に宛てた手紙の中で「一般の人々の役に立つ書物の他に私は、学校に向けた、また知識のない階級の人々に向けた、プロ

イセンの歴史・地理・統計の教科書執筆を試みたい」²²と述べている。この言葉からも分かるように、ドームはとりわけプロイセンに関心を持っていたのだが、ドームは単に学問的考察の対象としてプロイセンを把握しているのではなく、プロイセン国家に仕官したいという現実的な希望を非常に強く持っていた。1773 年5月、ドームはライプツィヒからベルリンに移り、フリードリヒⅡ世の末弟にあたるフェルディナントの宮廷で Pagenhofmeister (私訳「貴族子弟教育官」) になった。ようやくプロイセン宮廷への仕官がかなったわけだが、この教育官の身分はさほど高いものではなく、ドームは着任後1ヶ月にして早くもグライムに宛てて現状に対する不満の言葉を述べている。

ケンペルの遺稿発見のニュースが伝わったのはちょうどこの 1773 年の時である。グローナウのドーム伝にはごくわずかにこの事が触れられているのみであり(600 ページ余の著書の内、わずか1ページを費やすに過ぎない)、また間違いがないわけではない。例えばグローナウは、スローンが購入した原稿は単なる写しであって、再発見されたものこそケンペルの真筆と考えている²³。ドームは地理学者ビュッシング(Anton Friedrich Büsching, 1724-93)に相談し、彼のすすめに従って『日本誌』の編集を始めた。上に記したように、1777 年と 79 年に『日本誌』全2巻が出版されるが、出版社マイヤー書店(Meyersche Buchhandlung)はレムゴにあり、社主ヘルヴィング(Christian Friedrich Helwing, 1725-1800)はレムゴのギムナージウム校長や Fürstlich Lippischer Rat (私訳「リッペ侯顧問官」)を歴任した後、1785 年にはレムゴ市長に選出されている。(ちなみにエンゲルベルト・ケンペルの兄ヨアヒム[Joachim Kaempfer, 1695-1700]もレムゴ市長をつとめた。)ドームはヘルヴィング校長時代のレムゴのギムナージウムに学び、また後にこのヘルヴィングの娘と結婚している。(グローナウのドーム伝を出版したのも、実はこのマイヤー書店である。)

ケンペル『日本誌』を編集していた頃のドームは、どのような事柄に関心を示していたのであろうか。そのことを知るための貴重な証言がある。ドームはインド論執筆の計画をグライムに伝えて次のように言っている。「この著作の中心をなす理念は、南アジア、インド、中国が、人の住む最古の国々の一つであり、人間性の真の祖国であることを証明することである。[……]この著作とケンペルによって、人類の歴史、南アジアの哲学的・宗教的・政治的思潮の歴史が、今や私の主たる専門研究領域となっている」²⁴。この発言から分かるように、ドームは「南アジア」の歴史に並々ならぬ関心を示しているが、ドームは日本を南アジアに含めて考えており²⁵、日本を含むアジア史を人類史全体の中で位置づけようと計画していたものと考えられる。

さてプロイセンでの貴族子弟教育官の職務内容に不満を抱いたドームは、結局 1774 年ゲッティンゲンに向かい、法律学研究をすすめる決意をする。ゲッティンゲンでは、主に国法学・歴史学・統計学を学び、シュレーツァー(August Ludwig von Schlözer, 1735-1809)やリヒテンベルク(Georg Christoph Lichtenberg, 1742-99)といった著名な教授の知遇を得たが、とりわけシュレーツァーからは高い評価を得ている。またゲッティンゲンではボイエ(Heinrich Christian Boie, 1744-1806)と共同編集で、1776 年から Das deutsche Museum 誌(私訳『ドイツ博物館』)を発行している。

1776 年、ドームはカッセルの高等教育機関 Collegium Carolinum の教授に迎えらる。カッセルの同僚にはフォルスター(Gerog Forster, 1754-94)がいた。フォルスターがクック(James Cook,

1728-79)の世界周航から帰国したのは 1775 年であり、有名な『世界旅行記』(Reise um die Welt)が出版されるのは 1779-80 年であるから、ドームが同僚フォルスターから異国に関する様々な情報を得たであろう事は想像に難くない。だが、こうしてカッセルに教授職を得たドームではあるが、プロイセンに仕官したいという希望は再び強くなり、グローナウはドームの気持ちの強さを「一刻も早くプロイセンに仕官したいという[……]燃えるような希望を、彼は捨て去ることはなかった」²⁶と述べているほどである。

ドームは 1779 年にはカッセルの教授職を辞してベルリンに行き、das Geheime Hauptarchiv(私訳「枢密中央文書館」)の文書登録官になった。また 1780 年には Departement der auswärtigen Angelegenheiten(私訳「外務局」)兼務も命ぜられている。こうしてドームのベルリン時代が始まるのだが、ドーム自身の期待とは裏腹に、与えられた職務はまたしても彼にとって満足の行くものではなかった。むしろこの時代のドームにとって重要なのは、ベルリンの知識人たちとの交流である。

1781 年ドームは、彼の名声を一躍高からしめることになるユダヤ人解放論「ユダヤ人の公民的向上について」(Über die bürgerliche Verbesserung der Juden)を発表するが、この論文執筆の契機を与えたのは、モーゼス・メンデルスゾーン(Moses Mendelssohn, 1729-86)である。かねてよりメンデルスゾーンは、エルザスのユダヤ人たちから、ひとつの建白書の草稿執筆を頼まれていた。フランス政府に対し、ユダヤ人への抑圧状況の变革を求めるものである。メンデルスゾーンはドームに対し、この建白書編集作業への参加を求めた。ドームは建白書編集に参加する一方、自分自身の思想を別の文書にしたため発表した。それが上記のユダヤ人解放論である。ドームのこの論文は非常な反響を呼び、1782 年には仏訳が出版され、また 1783 年にはドイツ語版の改訂版が出版された。

ドームはベルリン時代にメンデルスゾーンのほか、ツェルナー(Johann Friedrich Zöllner, 1753-1804)、シュパルディング(Johann Joachim Spalding, 1714-1804)、ゲーディケ(Friedrich Gedike, 1754-1803)、スヴァレツ(Carl Gottlieb Svarez, 1746-1798)、クライン(Ernst Ferdinand Klein, 1744-1810)といった人々との交流を持ったが、彼が交流を持った人々の多くは、1749 年に組織された「月曜会」(Montagsgesellschaft)のメンバーであった。またベルリンにはこれとは別に「木曜会」(Donnerstags=Gesellschaft)なる組織があり、おもに聖職者がメンバーとなっていたが、ドームは聖職者でなかったにもかかわらずこの会への参加を認められていた。

これらにもまして重要なのは 1783 年に設立された「水曜会」である。この会は正式には「啓蒙主義の友の会」(Gesellschaft von Freunden der Aufklärung)と称し、「月曜会」の上に記したメンバーのほかドームも会員であった。この会はメンバー数の上限が 24 名と定められており、欠員が生じた場合、のこるメンバーの全員一致によって新メンバーが選出された。夏期は月 1 回第 1 水曜に、冬期は第 1・第 3 水曜に会合を開いて、メンバー 2 人が講演をなし、講演ののち質疑応答が続いた。講演と質疑応答には 2 時間半を費やし、午後 8 時に終了したのち会食、という進行になっていた²⁷。グローナウによれば、この水曜会は「プロイセンの立法について、少なからざる影響力を有していた」²⁸とされる。たしかに水曜会のメンバーであった法学者スヴァレツは「プロイセン

一般ラント法」(Allgemeines Landrecht für die Preußischen Staaten, 1794)の起草者であったし、このスヴァレツに協力したクラインも同会のメンバーであった²⁹。水曜会の内部では、あらゆる意見表明の自由が認められていたが、外部に対しては、誰がメンバーであるかさえみだりに口外してはならないものとされ、また講演の原稿も原則として部外秘であった³⁰。とはいえ実際には水曜会での講演原稿はしばしば『ベルリン月報』誌に(そのままの形ではないにせよ)掲載されることがあり、メンデルスゾーンの有名な「啓蒙するとは何の謂いか？」も、もともとは水曜会での講演原稿であったと推測されている³¹。(『ベルリン月報』への寄稿者の多くは、水曜会の会員でもあった。)ドームが水曜会でどのような講演をなしたかは不明である³²。われわれとしては、ドームが水曜会の自由な議論の雰囲気(それは水曜会の内部に限られたものであったが)に接し、そこで様々なベルリンの知識人たちと交流を持ったということを確認することを以て満足せざるを得ないであろう。

本論文の課題は、ケンペルとの連関でドームの生涯を調査することにある。その際、ドームがどのような領域に学問的関心を持っていたのかを、伝記的事実なかんづく彼の周囲の人々との交流の面から浮かび上がらせようとしてきた。ドームの後半生については、ケンペル『日本誌』編集との連関が薄くなるばかりであるから、詳論することは控えたい。ドームはベルリン着任後しばらくしてから学問的世界から政治の世界に急速に重心を移動する。1786年には貴族に叙せられ、フランス革命に際しては外交官として活動した。その後1810年に引退し、1820年に没している。

4 鎖国と啓蒙——ドームのケンペル批判

ケンペル『日本誌』編集作業前後のドームについて、われわれはおもに彼を取り巻く知的・人的環境について調べてきた。これらのことをふまえて、ここで再度『日本誌』に対する編者ドームの立場を考察しよう。ケンペルに対するドームの評価は、既に述べたようにドームの編集態度に端なくもあらわれているが、筆者がここで注目したいのは、ケンペルを批判する文書をドームが他ならぬ『日本誌』のなかで提出しているという点である。ドーム版『日本誌』には、ケンペルの別の著書『廻国奇観』(Amoenitates Exoticae, 1712)から6つの章が、原文のラテン語よりドイツ語に訳出の上、付録として収められている³³。ドームはここでは編者というより訳者の役割を担っているのだが、これら6つの章のうち、日本の鎖国を論じた章(以下に「鎖国論」と称する)に関しては——訳者としての分限を大幅に越えたことと言わざるを得ないが——ケンペルの論述に付加してドームは8ページ余の批判文を掲載している³⁴。つまりドームはここで編者・訳者としてではなく、一人の批評家としてケンペルと対峙しているのであり、それだけにドームの思想、彼の立場がこの批判文の中にはきわめて明確にあらわれていると言える。

ケンペル『日本誌』は、大胆に言えば、異なる3つの性格を併せ持つものである。第1は紀行文としての側面。ケンペルは2年間の日本滞在中に2度、オランダ商館長の江戸参府旅行に同行しており、時の将軍徳川綱吉に拝謁している。その旅行記はきわめて生き生きとした描写に満ちており、今日のわれわれに江戸時代の日本を現前させてくれる。第2に指摘しうるのは、資料集

としての側面である。この部分は、旅行記の部分とは異なり、無味乾燥と言ってよいほど、ただただ資料が羅列的な形で記述されている。そして第3の側面はいわば文明批評ないし比較文化論とも言える部分で、ここでケンペルは一種の批評家として論述をなしている。「鎖国論」はその代表といえる。

「鎖国論」とこれに対するドームの反論に関して言えば、文明批評家ケンペルに対し、ドームが同じく批評家としてこれを批判している、という趣がある。それでは、鎖国についてのケンペルの立論はどのようなものであり、ドームはケンペルの論に対してどのような批判をなしたのであるか。

ケンペルは、国を閉ざすこと一般については賛成しないものの、こと日本に関する限り、その鎖国政策は妥当なものであると論じている。なぜ日本においては鎖国政策が妥当なのか。ケンペルによれば、日本は他国との交流を必要としないほど物資に恵まれ、また日本人は優秀であるからである。たとえば日本人の技術力の高さについてケンペルは「この高貴な国民にとって、技術力の点からして加工できないような材料は国内では何ひとつなく、彼らは自らの精神と勤勉さをこの加工術に傾注し得た。それゆえ彼らは、外国からの教師を必要としない」(S.402f.)³⁵と述べ、また日本人の生活ぶりに関しても「彼らは服装、身体、習慣および住居のすべてに関し、とりわけて清潔で好感が持てる」(S.401)と断言している。このような物質面での優秀性の他にケンペルが指摘しているのは、精神生活における日本人の優秀性である。日本人の宗教に関し、ケンペルは次のように言う。「日本では無神論が支配的なのではない。むしろこの国独自の宗教が存在するのである。自分独自の方法で神を敬う自由を、誰もが有しているが、その礼拝方法はたいいていの場合非常に厳格に守られている。美德の実践、神に対する畏敬の念と清浄な生活、心の修養、罪へ懺悔、および永遠の幸福を願う点において、日本人の熱心さはキリスト教徒よりもはるかに大きい」(S.404)。われわれが注意すべきは、このような日本人のことを、ケンペルが「かくも啓蒙化された国民(eine[r] so aufgeklärte[n] Nation)」(S.404)と表現している点である。つまりケンペルは日本人の優秀性を表現すべく「啓蒙」の概念を使用しているのである。もう一カ所、「啓蒙」という語をケンペルは使用している。それは日本人の学問水準の高さを論じた箇所である。そこでケンペルは次のように言う。「ヨーロッパ人を別とすれば、かつて地球上のいったいどのような国民が、これほど神々しい段階に達したことがあろうか。人間精神がこれほどの啓蒙(Aufklärung)に到達したところが、西洋世界をのぞいて他にあろうか」(S.404)。この文言から分かるようにケンペルは日本が西洋と並んで高度な啓蒙の段階に達していると論じ、それゆえに他国との交渉を欠いても、いわば文化的に自給自足しうると考え、鎖国を妥当なものと断じているのである。

ケンペルのこのような鎖国論に対し、ドームは4つの点から批判を行っている。第1にドームは、技術及び学問の点で日本人は、現時点ではケンペルの主張するほど優れてはいないと論じている。ドームによれば、「インド人、中国人、日本人が、非常に昔から、そしてかなり完成に近い程度で、ある種の技術と製作所を所有していたことは確かである。また多くの学問分野において、すでに数千年前から彼らが歩み始めていたことも確かである。しかし、われわれが歩み始める以

前に、彼らは停滞してしまった。そしてヨーロッパ人がすでに凌駕してしまった段階に、彼らはとどまっているのだ」(S.416)。ここにはドームの歴史観が端的にあらわれている。つまりドームは、アジア文化のかつての先進性を承認しつつも、現代(つまり 18 世紀後半)にあつてはヨーロッパ世界が既にこれを凌いでいる、との歴史認識を示しているのである。

第2にドームが批判するのは、日本人が置かれている状況に対するケンペルの判断である。ケンペルは自らの論考の最後の部分で「今ほど日本国民が自らを幸福であると思うときは、他にない」(S.414)と述べ、鎖国下の日本を評価しているが、ドームはこれに対し日本国内の厳しい国民管理の実態を重視し、「自分の友人すべてを絶えず見張らねばならない人々、そして自分が友人すべてから見張られているということを知っている人々は、いかに不幸なことであろうか」(S.418)と論じている。ここでドームは、為政者の過剰な監視を問題にしているのである。また第3にドームは、ケンペルの言うような武勇すぐれた英雄が日本史において登場した事実はないと述べ、ケンペルが日本史の史実を不正確に把握していると批判している。

最後にドームは鎖国そのものについて論じているが、ここでの論の立て方は、われわれには極めて興味深い。ドームは、たとえ文化的に自給自足していたとしても、外部からの刺激を欠いたままの文化は畢竟優れたものになり得ないと論じる。彼は論を続けて次のように言う。「ほかのあらゆる人間から、これほど敵視されたまま隔絶されて存在することは、この国民自体にとって大きな不幸ではないか。彼らは決して、文化と啓蒙(Kultur und Aufklärung)を進めることは出来ない。彼らは不自然にも、そこへの入り口を閉ざしているのだ。[……]彼らは決して、自分たちをこれほど暴力的に抑圧している専制政府を打ち破ってくれるような、外からの援助を期待できないのである」(S.422)。

ドームはケンペルを4点にわたって批判しているが、これらの批判を強引にまとめるならば、ケンペルが啓蒙の行き届いた日本における鎖国の実態を妥当と判断したのに対し、ドームは鎖国政策それ自体が啓蒙を拒否することになる、と考えている。つまりドームとケンペルの判断の相違が「啓蒙」観の相違の中に端的にあらわれている、と言えるのである。

5 ドームの時代と「啓蒙」の理念

ここでわれわれは「啓蒙」の概念について、歴史的に考察しよう。カントの有名な「啓蒙とは何か」(Beantwortung der Frage: Was ist Aufklärung?)が『ベルリン月報』に掲載されたのは 1784 年 12 月のことである。同じ年の9月には、やはり『ベルリン月報』に、モーゼス・メンデルスゾーンの論文「啓蒙するとは何の謂いか」(Über die Frage: was heißt aufklären?)が掲載されている。カントとメンデルスゾーンがほぼ同時に「啓蒙」について論じたのは偶然ではない。両者の論文ともに、前年『ベルリン月報』の中でツェルナーが発した問い「啓蒙とは何か」に対し、いち早く応答したものである。このことから分かるように「啓蒙」の概念は、ドイツでは 1780 年代という時点——ドーム版『日本誌』が出版されたのは、この数年前である——においてなお、雑誌での論議の対象となり得る、ひとつの流行の概念であった。

ここで18世紀後半のドイツにおける「啓蒙」の位置づけを示す例を挙げよう。それはマティアス・クラウディウス(Matthias Claudius, 1740-1815)の一連の作品である。非常に興味深いことに、クラウディウスはケンペルの『日本誌』を利用しつつ、その中で啓蒙について(皮肉っぽくではあるが)触れている。クラウディウスは1778年に『日本皇帝謁見記』(Nachricht von meiner Audienz bey'm Kayser von Japan)という、ひとつのフィクションを発表した。このフィクションのなかで「私」なる人物が「甥」とともに日本を訪問する。(「甥」のほうはケンペルをモデルにしていると言われる。)そして「私」と「甥」は江戸で皇帝(将軍)に拝謁する。「私」がドイツの知識人について皇帝に説明すると、皇帝はとりわけレッシングに興味を示し、次のように言う。「私はレッシング氏のことが気に入った。ひょっとして氏は日本に来る気はないだろうか。」³⁶このフィクションが発表された1778年にはレッシング(Gotthold Ephraim Lessing, 1729-81)は存命中で、その代表作『賢者ナータン』が発表されたのは翌79年のことである。クラウディウスの作品は、フィクションとは言え、もしも実際に江戸時代の日本にドイツ啓蒙主義の中心人物レッシングが来たならば、と想像するだけで微笑を誘われる状況設定だが、ここでわれわれにとって重要なのは、日本についてのクラウディウスの叙述の中に、啓蒙主義をめぐる議論が入ってきている、という事態である。このような事態はクラウディウスの次の作品にも見られる。『日本皇帝謁見記』が発表された12年後の1790年クラウディウスは、日本皇帝が「某氏」(おそらくは帰国した「私」)に対して送った手紙(これは Schreiben des Kaisers von J-p-n an einen gewissen --- と題されている)——もちろんフィクションである——を発表した。その中で日本皇帝は次のように言う。「貴殿が当地に来られて以来、学問や啓蒙をめぐる事態は、若干変化しました。私は今、ヨーロッパ人のあとを追っている状態です。[……]私は啓蒙なるものを手に入れたいと思っていますのです(Ich möchte gern eine Aufklärung haben)」³⁷。クラウディウスの作品には日本を戯画化している面があり、ドームやケンペルのように「啓蒙」の問題を、正面から議論の対象として扱っているわけではない。しかしながらわれわれとしては、クラウディウスが18世紀後半のドイツにおける流行の概念「啓蒙」を、日本に関連させつつ自作の中に取り込んだという点に、18世紀北ドイツの知的雰囲気的一端をかいま見る思いがするのである³⁸。

それでは、ドイツ語において「啓蒙」の語が登場するのはいつごろなのであろうか。ヨアヒム・リッターの哲学辞典³⁹によれば、ドイツ語においては名詞 Aufklärung に先行して、過去分詞形容詞 aufgeklärt が使用されはじめた。その最も早い使用例は、ブロッケの『神における世俗的享受の集』(Brocke: Sammlung irdischer Vergnügen in Gott)であるとされるが、この書が出されたのは1727年のことである。名詞 Aufklärung の最初の使用例について、同辞典は具体的な例をあげていないが、名詞の使用例が過去分詞形容詞の登場に遅れるのであるから、いずれにせよ、18世紀に入ってからであることは確かである。また、オットー・ブルンナー等編の『概念史辞典』⁴⁰によれば、Aufklärung の語は、確かに17世紀に使用例が見られるものの、それは「晴天」「晴になること」等、天候現象を意味し、18世紀に入ってから、とりわけ1720年代以降、こうした天候現象の他に、「人間の心を(神によって)明るくすること」「照らし出すこと」という意味をも持つように変化していった。こうして18世紀前半に Aufklärung の語がかなり使用されるようになったが、この時

点ではまだ「一民族、一国家の国民の蒙昧が啓かれてあること」の意味では用いられていない。日本語の「啓蒙」が含意するような意味内容をドイツ語 *Aufklärung* が持つようになったのは、18 世紀後半、それも 1770 年代に至ってからであるとされる。「およそ 1770 年以降＜啓蒙＞は[…]、ある共同体ないしある民族の、明晰で統一的な原理に基づくところの、道徳的文化的状態という意味で理解されるようになった」⁴¹。

このような事態は、啓蒙時代のドイツに生きる人々もまた認識するところであった。先に紹介した『ベルリン月報』に掲載された論文の中でモーゼス・メンデルスゾーンは次のように言っている。「啓蒙、文化、教養という三つの言葉は、われわれの言語の中ではまだ新語である」⁴²。すなわち 1784 年の段階でなお、メンデルスゾーンは *Aufklärung* を *Kultur* および *Bildung* とならぶ新語と認識していたわけである。

「啓蒙」の概念をめぐる歴史を考察してみると、われわれは次のように言い得るであろう。すなわちドーム版『日本誌』が出版された 1770 年代は(それに続く 10 数年を含めて)、まさしく「啓蒙」が北ドイツの知識人たちの間において、きわめてアクチュアルな議論の対象となっていたのであり、ドームはそのような知的状況の中で『日本誌』の編集作業に従事し、ケンペルへの批判文を書いたのである。

6 結語——「啓蒙」の文脈におけるドーム

本論文において筆者はドームの活動の二側面に着目してきた。上に見たようにドームの『日本誌』の編集内容には様々な問題点が見出されるが、筆者はこうしたドームの態度を彼個人の問題として捉えるのではなく、むしろ 18 世紀北ドイツの知識人たちが「啓蒙」によせた期待感の如きものが、ドームの編集態度の中に浸潤してしまったのではないかと考える。

上にも記したように、『日本誌』の「鎖国論」は元来ケンペルが『廻国奇観』において発表したラテン語の論文である。『廻国奇観』が出版された 1712 年は、上に紹介した概念史的研究に従えば、*Aufklärung* の語はいまだ今日の意味で登場してはいない。ケンペルが今日の意味における *Aufklärung* を念頭に置きつつラテン語文⁴³を執筆したとは考え難いのである。ケンペルは確かに日本を賞賛したが、18 世紀後半の「啓蒙」の概念は、ケンペルのあずかり知らぬところであった。思うにドームは 18 世紀後半の啓蒙の時代に生きた人物として、ケンペルの文章の中に知らず知らずのうちに自己の時代の流行概念を読み込み、いわばおのれが作りなした虚像としてのケンペ尔的「啓蒙」を批判の俎上にのせたのではないか。そしてこうしたことは、「啓蒙」がきわめてアクチュアルな意味を持っていた 18 世紀後半の北ドイツに生き、そして同時代のさまざまな知識人たちと交流を持ったドームが、いわば「啓蒙の文脈」の中でこそなしたことである、と解し得るのではなかろうか。

⁴¹ ドームは、アルニム伯(Graf Arnim)に対して 1785 年秋から 1786 年 7 月にかけて国民経済学の私的講義をな

したが、フンボルト兄弟はそこへの同席を許された。その講義ノート(ヴィルヘルム・フンボルト筆記)は、Aus Dohms nationalökonomischen Vorträgen と題されてフンボルト全集に収められている。Vgl. Wilhelm von Humboldts Gesammelte Schriften. 7. Bd. 2. Hälfte, Berlin 1907 (Nachdr., Berlin 1968) S. 507ff.

² Kaempfer, Engelbert: History of Japan. Tr. by J. G. Scheuchzer, London 1727.

³ Kaempfer, Engelbert: Geschichte und Beschreibung von Japan. Aus den Originalhandschriften des Verfassers herausgegeben von Christian Wilhelm Dohm. I. Bd., Lemgo 1777, II. Bd., Lemgo 1779. なお本論文において同書より引用する際には復刻版 (Stuttgart 1982)を使用する。同書からの引用に際しては、今井正訳『改訂増補 日本誌(上・下)』(霞ヶ関出版、1989年)を参照し、一部訳語を採用させていただいた。

⁴ ロストク版はほとんど反響を呼ばなかった。Vgl. Kaempfer: a.a.O. Bd. 2, Einführung zum Neudruck (von Hanno Beck) S. II.

⁵ Allgemeine Deutsche Biographie, Bd. 5, Berlin 1877 (Nachdr. Berlin 1968) S. 297ff.

⁶ Killy, Walter (Hrsg.): Deutsche Biographische Enzyklopädie, Bd. 2, München 1995, S. 581f.

⁷ Kaempfer: a.a.O. Bd. I, S. XLf.

⁸ Kaempfer: a.a.O. Bd. I, S. XLII (Einleitung des Herausgebers).

⁹ たとえば小堀桂一郎『鎖国の思想 ケンペルの世界史的使命』(中央公論社、1974年)52ページを参照。

¹⁰ 英訳版の底本となった原稿の真贋についての議論は Massarella, Derek: The History of *The History*, In: Bodart=Bailey, Beatrice M. and Derek Massarella (ed.): *The Furthest Goal. Engelbert Kaempfer's Encounter with Tokugawa Japan*. Folkstone (Japan Library) 1995, p. 126 に詳しい。

¹¹ Hüls, Hans: Zur Geschichte des Drucks von Kaempfers "Geschichte und Beschreibung von Japan" und zur sozialökonomischen Struktur von Kaempfers Lesepublikum im 18. Jahrhundert. In: OAG(Hrsg.): Engelbert Kaempfers Geschichte und Beschreibung von Japan. Beiträge und Kommentar. Berlin/Heidelberg/New York 1980, S. 205.

¹² 以上の経緯については前掲 Massarella の論考による。

¹³ Vgl. Bodart=Bailey, Beatrice M.: Warum noch einmal Kaempfer? In: Lippische Mitteilungen, 57. Bd., 1988, S. 154. なお当該箇所は前掲今井訳(下巻 26 ページ)では「彼らは逮捕術に長け」と訳されている。今井氏が大英博物館のケンペル自筆原稿を参照した可能性はきわめて低いから、おそらく訳者としてのセンスでドーム版の原文に違和感を覚え、前後関係から適切と思われる訳文を作成したものと想像される。

¹⁴ Bodart=Bailey: a.a.O. S. 153.

¹⁵ Bodart=Bailey: a.a.O. S. 154.

¹⁶ Bodart=Bailey: a.a.O. S. 149.

¹⁷ Gronau, Wilhelm: Christian Wilhelm von Dohm nach seinem Willen und Handeln. Lemgo 1824.

¹⁸ Dambacher, Ilsegrit: Christian Wilhelm von Dohm. Bern/ Frankfurt a.M. 1974.

¹⁹ Gronau: a.a.O. S. 8.

²⁰ 不詳。ライプツィヒ大学教授の Johann August Ernesti, 1707-81 ないしその甥で同じくライプツィヒ大学教授 August Wilhelm Ernesti, 1733-1801 かと想像される。グローナウのドーム伝にはこのエルネスティはじめ、人名は

単に姓が記されているのみで、名や生没年など一切記載されていない。グローナウに依拠するダムバッハーも同様であって、エルネスティについて姓しか記載されていない。

²¹ Zitat nach Gronau: a.a.O. S. 15. グローナウはこの手紙の出典を記していない。本論文では、以下にドームがグライムに宛てた手紙もグローナウから引用するが、グライム宛ての手紙も出典が明記されていない。ダムバッハーによればグローナウはドームの娘婿であり(Vgl. Dambacher: a.a.O. Anm. S.1)、おそらくグローナウはドーム関係の一次資料を自ら所持していたのであろう。

²² Zitat nach Gronau: a.a.O. S. 27.

²³ Vgl. Gronau: a.a.O. S.31.

²⁴ Zitat nach Gronau: a.a.O. S. 33.

²⁵ Vgl. Kaempfer: a.a.O. Bd. 2, S.416. ケンペルの鎖国論に対してドームが批判を加えた部分に「南アジア」という語が出てくる。前後の文脈から判断して、ここには日本が含まれる。

²⁶ Gronau: a.a.O. S. 54.

²⁷ Vgl. Gronau: a.a.O. S. 123.

²⁸ Gronau: a.a.O. S. 122.

²⁹ プロイセン一般ラント法と水曜会の関係については、拙論「初期フンボルトの国家論とプロイセン国家」東京大学教養学部『教養学科紀要』第20号(1988年)83ページ以下を参照。

³⁰ Vgl. Hinske, Norbert (Hrsg.): Was ist Aufklärung? Beiträge aus der Berlinischen Monatsschrift. 3. Aufl. Darmstadt 1981, S. XXVI.

³¹ Vgl. Hinske: a.a.O. S. XXIXf.

³² 『ベルリン月報』にドームの文章は1度しか掲載されていない。それは「王立枢密国家内閣大臣ヘルツベルク伯爵閣下宛の手紙からの抜粋」(Auszug eines Schreibens an den Königl. wirklichen Geheimen Etats- und Kabinettsministers Grafen von Herzberg Excellenz.)と称するもので、1786年に掲載されたものである。Schulz, Ursula: Die Berlinische Monatsschrift. Eine Bibliographie. Hildesheim 1969, S. 105を参照。

³³ 『廻国奇観』から6つの章を抜き出して付録とするということは、実はドームのアイデアではなく、英訳版に見られるものであり、元来はショイヒツァーのアイデアである。ショイヒツァー版でも6つの章が『廻国奇観』から英訳されており、この6章はドーム版の6章と全く一致する(但し配列は異なる)。このような事態があるにもかかわらず、ドームは英訳版に想を得たことについては、全く言及していない。

³⁴ 批判文は Nacherinnerung des Herausgebers と称するもので、このような批判文はショイヒツァーの英訳版にはなく、ケンペルの鎖国論に対する批判を付すという考えが、ドーム独自のものであったことが分かる。

³⁵ 「鎖国論」およびそれに対するドームの批判文は、Kaempfer, a.a.O. Bd. 2より引用し、ページを本文中にカッコにくくって示す。

³⁶ Claudius, Matthias: Sämtliche Werke, München o.J., S. 139.

³⁷ Claudius: a.a.O. S. 313.

³⁸ 本論文にも述べたように、クラウディウスの『日本皇帝謁見記』が発表されたのは1778年である。ところでケンペル『日本誌』の江戸参府旅行の部分は下巻にあり、ドーム版下巻が出版されたのは1779年である。つまりク

ラウディウスはドーム版下巻を見ないままに、将軍と「私」の会見記を創作したことになる。クラウディウスが英訳版あるいはロストク版等を参照したかどうかは不明であるが、カピツァによれば英訳版出版以後ドーム版出版までの間に、ドイツでも様々な形で『日本誌』受容が行われており(Vgl. Kapitza, Peter: Engelbert Kaempfer und die europäische Aufklärung. In: OAG(Hrsg.): Engelbert Kaempfers Geschichte und Beschreibung von Japan. Beiträge und Kommentar. Berlin/Heidelberg/New York 1980)、クラウディウスが『日本誌』におけるケンペルの江戸参府旅行についてドーム版以外のルートで情報を得ていたとしても不思議ではない。

³⁹ Schalk, F.: Aufklärung. In: Ritter, Joachim (Hrsg.): Historisches Wörterbuch der Philosophie. Basel/Stuttgart 1971, Bd. 1, S. 620ff.

⁴⁰ Stuke, Horst: Aufklärung. In: Brunner, Otto u.a.(Hrsg.): Geschichtliche Grundbegriffe. Historisches Lexikon zur politisch-sozialen Sprache in Deutschland. Bd. 1, Stuttgart 1972, S. 243ff.

⁴¹ Stuke: a.a.O. S. 249.

⁴² Mendelssohn, Moses: Gesammelte Schriften. Jubiläumsausgabe. Bd. 6-1, Stuttgart 1981, S. 115.

⁴³ ちなみにドームが「啓蒙」と訳した語をふくむ文章の原文は"*Ast, quae est extra Europam gens horum facrorum capax ? quodnam est, praeterquam Occidentis nostri, ingenium, quod usquam terrarum hac luce clareat ?*"である(*Amoenitates Exoticae*. Lemgo 1712, S. 489)。筆者は「鎖国論」ラテン語原文コピーを同僚の原田裕司助教授より賜った。ここに記して厚くお礼申し上げる次第である。